コメントＣ：上野田鶴子（研究者の立場から）

教科に対する年齢差

上野　　ブランクシートをお配りして大変申し訳ないのですが、今お配りしました３人のお名前が載っているもの、これをお配りしましたのは、１つには参考文献を是非皆さんにお知らせしたかったということがございます。これは、筆者がここにいらっしゃるのですけれども、入手できやすい文献でありまして、非常に全般にかかわる問題が述べられておりますし、国内外の貴重な文献のリストもつけられておりますので、今後具体的な問題に移られる時に参考になさる文献として是非ということで、ここに載せさせていただきました。

ブランクになっておりますけれども、初めに少し気付いた個々の点をそれぞれの方について申し上げ、最後に全体的なことに関することを申し上げたいと思います。

最初の足立さんのご発表ですけれども、これは 13 歳から 17 歳という年齢の学習者でボランティアグループとしてなさったということですが、年齢差による知識の差をあまり考慮しないでいいという前提に立ってなさったということを伺っておりますが、特に教科が数学ですから、数学という教科はおっしゃったようにある意味では普遍的な内容ですので、また数式という媒体もありますけれども、算数・数学は規則の積み重ねで内容が理解されるものでありますので、こういった発達の年齢であり、年齢差が大きくあります時に、果たして共通の規則を積み重ねているのであろうかということ。ですから、今申し上げたことは今回の学習に関しては、前提としては共通のものであったということですが、教科を取り上げる時に、その教科に特徴的な側面があるということも、特に年齢差があるような場合には考える必要があるのではないかと思います。

外国人学習者に関わる日本人も学ぶ

それから、ここで大変良かったと思いますのは、午後の方に関わっていただかれたということと、それから、同じ日本人の生徒が関わったのでしたよね。今回の場合は日本人が母語話者になるわけですけれども、特に同年代の母語話者が関わるということは、これは学習者のみではなくて関わった人に大変な勉強になると思いますので、特にこのように多くの外国人の学習者を受け入れている現時点におきましては、日本人の生徒も大きく学ぶということを教える方で配慮して外国人も学ぶのだけれども、日本人の生徒も同時に学ぶんだということを考えた学習環境を作るというのが大事ではないかと思いました。今後ということですけれども、特に数学というようなことですと、かなりこれは個人差が大きいのではないかと思うので、やはり個人のニーズに合わせた塾のような形での指導をすると同時に、日本語の指導をそれを通じてなさるということがいいのではないかとお話しを伺っていて思いました。

二次的言語の育成の問題

２番目の太田垣さんの話しでは、日常言語と一時的言語と二次的言語ということについて、大きくきちんとボーダーラインを引いてかかってらっしゃるということで、これは参考文献にもきちんとそのことがいろいろな条件で説明されておりますけれども、日常、一時的言語が滑らかに使えたとしても、必ずしもそれが二次的言語の使用には繋がらないという。これは第一言語の場合も同様であると思われます。このような言語発達期に関与する一時的・二次的言語の発達というのは第一言語も第二言語も共通の側面を持っているわけですが、第二言語の場合には第一言語の保持、母語・母文化の保持ということがあって、それをどのようにしていくかということが大きな問題になるかと思います。二次的言語の育成ということは、これは第一言語でもかなり難しいことでありまして、実際にこれはどのぐらい、先ほどの大堀さんのコメントにもあったかと思いますけれども、国語教育の中でこういったことを真っ正面から取り上げているかどうかということがあると思うのですが、これも言語教育に共通の問題として外国人の場合に焦点を当てながら、第一言語の問題としても取り上げる必要があると思いました。太田垣さんのこの 3 名の場合には、調査をさせたり、それからやはり母語話者との接点を十分に持たせていらっしゃるというようなことですね。この母語話者が日本での教育は潤沢にあるわけですから、特に同年齢の母語話者を活用なさるということはとても大事なことではないかと思います。それから、第二言語の場合には、論理構成を持つ談話の展開というようなことがありましたけれども、相手に理解をさせる努力をさせていらっしゃる、このような準備が非常によくできていて最後の目的達成というところにステップが非常によく組まれていたように思います。評価の問題がこれからの問題として残るということがありましたけれども、一律の評価というのは非常に難しいのではないかと思いますので、それぞれの個人の中でどのような進展が見られたかというような評価にかなりの部分がなるのではないかと思われますけれども、評価の問題は私も今後の課題ではないかと思います。

水面下の規範を知る

３番目の柳澤さんの発表については、これは学習環境と学習活動という非常に広い観点から取り上げられたものですけれども、特に、水面下の規範ということが大きな問題であるかと思います。言語教育という時に、割に形式的に見えるところに注目するわけですけれども、私たちが持っている常識であるとか、知識の枠組みであるとか、推論であるとか、これはどの問題に関しても関わってくることですけれども、そういった一見気をつけていないところの問題、どういう常識を持っているか、母語・母文化によってどういうことが常識になっているか、どういう知識の枠組みをその年齢の子が備えているか、それから、言語使用は言語形式の上だけに立っているわけではなくて、推論を使ったり、そういった知識の枠組みを使って行なわれるわけですから、そういったような枠組みをその学習者がどのような状態にあるのかということを教師の方が知らなければならないわけですけれども、これはなかなか大変なことだと思います。こういったことが学習環境、水面下の規範についての研究であるとか、学習活動にもそういったことを取り入れた認知心理学的な側

面を取り入れた教育のあり方をこれから研究していくことが必要であると思うのですが、特に現場の先生方の情報交換の場がもう少し頻繁にまた広くあるといいように思われます。

最後に、今もう申し上げてしまったのですけれども、太田垣さんのところで取り上げられました一時的言語と二次的言語というもののはっきりした違いを踏まえた、我々は言語教育をしなければいけないということと、それからその背後にあるもの、我々が気がついていないようなことが教育の中であらわになってくる。そしてそれには母語・母文化というものが強く関わっているということ、また年齢によっては知的発達が同時に進行しているということで、その制約もあるということ、これは昨年も随分出たように思いますけれども、こういったことを教育の中に大きく取り入れていく必要があるのではないかと思いました。お二方とも注目しておられましたけれども、日本人の生徒あるいは情報提供者を大いに活用してらっしゃるということ、これは日本人側にとっても大きな学習の機会になる。こういった相互に実りのある教育ということが、日本の国内で広がっていくことが望ましいのではないかと思いました。以上です。

参考文献

西原鈴子（1996）「外国人児童生徒のための日本語教育のあり方」『日本語学』vol.15:2